

# 観音

平成3年7月

第15号  
年2回発行  
発集発行

広島県安芸郡府中町  
茂陰2丁目2-8-10  
真言宗 正観寺

小出真行



心の迷いは、

常に人生に

波風を立てて止まぬ

為智泉達観文より

「どちらが好き？」

ある父親がわが子に向かって

「お父さんとお母さんとは、どちらが好きか？」と尋ねました。するとその子は、一枚のせんべいを目の前に出しパッと二つに割って

「お父さん、このせんべい、どちらの方がうまいと思う。」

と逆に問い返したそうです。「両親のどちらを好きか」といわれても、子供には返答のしようがありません。それを、せんべいになぞらえて「どちらがうまい」と逆に質問したところが、実能的をえた立派な答になっているではありませんか。「両親のどちらが好きか」という問いは、まさに愚問としかいいようがありません。子供にとって、両親はどちらもかけがえのないものです。そう思いませんか？

## 「心豊かに」

嫌われるお年寄 として、よく指摘される事柄があります。これも愛されるお年寄になるためには、一応心得ておく方がよいのではないのでしょうか。その事柄とは

- 一、少しも手本を示さず、行動もせず、昔の自慢話ばかりで、碎易させられる。
- 一、短気が高じて、口うるさく、くどい。などがそれですが、こうしたことは素直に受け止め、反省すべき事柄ではないでしょうか。

分相応の仕事は進んでやり、時々は「意気込み」を示す事も大切でしょう。それについて、こんな歌があります。

- 長生きは ただ働くのほかになし  
流るる水の くさらぬを見よ
- 古稀すぎて 動作にぶれど針運ぶ  
手はまだ確か ありがたきかな

こうした生き方は自然と感謝の念が湧き、心も豊かになり、きっと幸福をも招くでしょう。生きている限り、思考力や相応の体力がある限り、仕事や文化的な趣味に活路を見い出すことも、心が潤い豊かになる一

つの道だと思いませんか。……どうですか？  
ところで充実した生き方はするために、次のようなことも参考にしていただけならと思えます。

- 警老……老いぼれぬような努力と工夫をし、常に思考力を働かせる
- 計老……余命を考え、出来るだけ頭において計画的に物事を進め、対処する。
- 携老……老いも若きもお互いに智恵を出しあい、手を携えあい、助け合う必がけ。

「ケイロウ」は「敬老」ばかりでは、お年寄は浮き上がってしまいますが、以上のような三つの「ケイロウ」ならいかがでしょうか。

## 無欲



今年も、また、夏の選抜高校野球の時期となり、全国津々浦々で、球児が夢の甲子園出場を目指しています。

スポーツ放送などで、よく「無心の勝利」

とか、「無欲の成果」などと使われます。「無心」について、辞書で調べてみますと「心に何のわだかまりもなく、素直な心」「妄念がとり払われた心」と書いてあります。この「妄念」とはどんなものかと申しますと、欲心や動揺している心を指しますので、「妄念がとり払われた心」とは、不安定な心の状態ではなく、そのもの一筋になりきった心境を指します。これを仏教では「三昧」と申します。

よく「遊び三昧」とか「野球三昧」などといえます。その「三昧」であります。そして「三昧」にはりきった最高の境地を「王三昧」といいますが、「禅定」もこれと同じ状態だといってよいでしょう。

例えば、スポーツなどで「勝ちたい、勝ちたい」という自意識というか。目的意識があまりにも強すぎますと、それがかえってプレッシャーとなって体が萎縮してしまひ、普段の実力の半分も出きないまま、みじめに敗退する例はいくらでもあります。ですから試合などに臨むに当ってリラックスすることが特に要求されます。選手自身いつもそう思っているのでしょうか、いざ

ふたをあけるとなかなか簡単にはいかない  
ものようです。

ですからスポーツでは勝敗に、こだわり  
すぎるとかえって自滅しますし、商売にお  
いても損得にとらわれすぎで失敗します。  
入試などはプレッシャーのあまり実力を出  
しきれなかった例は沢山あります。

どうやら私達、人間という動物は万事に  
固執するあまりに、平常心を忘れがちに  
なりやすいものようです。何事にも動じ  
ない、澄みきった心、妄念のない「三昧」  
の状態とやらを味わってみたいものではね。

### お大師さまのことば

『四魔現前すれば、すなわち大慈三摩地  
に入り、四磨等を恐怖し降伏す』

四魔とは、蘊魔（肉体をもっているため  
に迷う魔）、煩惱魔（欲や怒りや愚かさの  
ために思いわずらう魔）、死魔（死を恐れ  
る心の魔と、死を誘う魔）、天子魔（善事  
をねたみ害を与えてやろうと、外からくる  
魔）の四つをいう。

これらは要するに、自分の心身の内側か  
ら起ってくる魔の思いと、外部から破壊的  
に追ってくる魔とにわけられますが、これ  
らの悪魔に出会った時には大慈三摩地（大  
いなる慈しみの心を起こして瞑想し、その  
精神統一）に入ることによって、四魔を降  
参させてしまうのです。

悪魔を降参させるのには、大慈三摩地に  
よるというこの教えは、高い次元の教えで  
あってなかなか理解しにくいものです。

悪悪魔というものは、すきあらば相手に損  
害を与えてやろう、という尖った破壊の思  
いが強いものですから、人を慈しむ思いと  
は逆の方向なのです。

従って、冷たい氷に対して太陽の光のさ  
んさんと光り輝く暖かさのようなものです  
から、この光に照らされると氷が解けてし  
まうように、大慈三摩地の思いは終いには  
降参しないわけにはいなくなるのです。  
それは相手を本当の生命に目覚めさせたい  
であって相手を叩きのめしてやっつけてし  
まう怖い思いではないからです。

### お墓まいり

お彼岸やお盆に、先祖の墓まいりはつき  
ものです。日ごろ信心など全く縁のない人  
が、このときばかりは親戚づきあいのた  
めとか、ハイキングがてらに、とかはある  
にしても多少は宗教心を發揮して神妙なお  
もむきでお墓まいりをします。

さて、お墓まいりに行きますには、まず  
花と線香を買い、墓地の人口で、桶を借り、  
お墓にそなえたり、墓石に水をかけたりし  
ますがいったい、何のためなのかお解りで  
すか。

お墓まいりは、先祖への「供養」だとい  
われますが、この「供養」、じつはインド  
が起源のもとなのです。原語は、サンスク  
リット語の「プージャー」「プージャー」  
で、もともとは、「尊敬」とか、「尊敬の  
思いをこめたもてなし」を意味することば  
でした。

いまでも、インド人たちはお客さんをも  
てなすのが大好きで、お茶によんだり、よ  
べれたりするのは日常のこと、ほんのちょ  
っと知り合いになっただけで、すぐ食事に



招待します。しかし、わが国では「そのうち遊びにいらして下さい」というのは、ほとんど社交辞令で、ともに「ハイそうですか。」ってなわけで、のこのこでかけましたり、とんだ迷惑／相手は困ってしまします。ところが、インド人は困るところか大歓迎なのです。古代インドでは「アティエイプージャー」（客人供養）といいますが、が重要視されていましたが、現在のインド人のもてなし好きも、このあたりに由来するのではないかと思われれます。

さて「供養」は「もてなし」なのですが、それにはそれなりの道具立てが必要です。贅沢をいえばきりがありませんが、必要最低限の道具立てということになりますと、インドでは、花とお香と水、それに加えて食事というあたりに落ち着きます。

花は、たいがい花輪にします。今でもインドの町のいたるところで、さまざまの花に目のさめるようなスピードで器用に糸を通し、花輪を売っている露店商がたくさんあるそうです。わが国ではお墓まいりに花輪をささげるといふことはありませんが、お葬式のと きなどに「花輪」と称する、紙で作った大きなものをたてかけますが、こ

れは、インドの風習がストリートに伝わったものだといえます。

お香は、白壇や沈香などを細かくくだいたものを炭火の上などにおいて焚いたり、水などでねって泥のようにしたものを体に塗ったりします。今ではインドでも日本と同様に手軽で便利なお線香がよく使われるようになりましたが、このお線香の出現はかなり新しいものと思われれます。

では、なぜお香を使うのがもてなしになるのかと申しますと、よくにおい消し、とか体臭消しだといわれれますが、決してそんなことではなく、お香は暑さを忘れさせ、気分をリフレッシュさせるいわば今はやりの清涼剤と一諸なのです。疑問をおもちの方はむし暑かったり、気分がムシヤクシヤしているときに、ちょっと値ははりますが、白壇のお線香でも焚いてみて下さい。きっと気分がよくなるはずですよ。

水は、熱乾の地が多いインドではまさに貴重品、飲み水だけでなくほてりなどで汚れた手を洗う水も、もてなしの一つだろうと思われれます。

わが国では供養といいますが、なんだか死者の供養みたいな感じがありますが、こ

のようにもとは、生きている人が相手だったのです。つまり死んでしましますと「成仏する」、死んだ人を「仏さん」と呼びますがおそらく、わが国の死者供養は、「仏」「仏陀」、つまり「さとった人」の供養というニュアンスをもってはじめられたのではないかと思われれます。それがどうやら仏教とは別にあった祖先崇拝信仰としっかり結びついて定着したということです。

## 編集後記

一九九一年の社会変動は、目まぐるしいばかりです。

外に目を向けますと、湾岸戦争も一応終結いたしました。油田炎上で太陽の光がさしこまない状態との事、バン格拉ディッシュでのハリケーン、ピナトゥポ火山の噴火、ソ連の内紛、国内では雲仙普賢岳の噴火による火砕流、信楽鉄道の事故、広島での工事現場事故、と目を覆う惨状が続出している。世界の人間同志が手を取りあって、自然の猛威から生命を守るべき方法を才智を出しつくして研究しなければいけない時期にきているのではと思う今頃です。

皆様の体験談や、人生論を幅広い掲載したいと思しますので、どんどんお寄せ下さい。